



志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
（株）武出版 093(962)7740 FAX093(961)8224
Eメール: saigoa@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

合気語録

自らの道標を見失うべからず
人各々と言うが、求道・精進の形で我が流を捕らえ、これに価値観を見出し、日々の日常を、非日常として考え、有事の際には己を全う出来る者である、指導的立場にある者である、この価値観は中々得難く、我がものにして置けるというものは稀のようだ。

したがって、「拝師の礼」という事が理解できず、武技を武術と捉えるか、あるいはスポーツと捉えるか等の、足並みの揃いがまた、「礼法」を識らない現実を生み出しているのである。故に、第一に啓蒙すべき事柄として、「拝師の礼」を挙げたのである。

現代流の考え方は、道場と言う場所を離れ、教わると言つ教授の形を取り去れば、単に平等だと言つ意識が強く、したがって子弟関係は平等であると言つ意識が、また「拝師の礼」を損なう結果を生み出している。時代が下れば下がるほど、「拝師の礼」は廃れたものになっている。いわゆる、尊敬されない現実が急速に進んでいるのである。

かつて私は、昭和五十三年当時、進龍一師範(当時は武段で准指導員)を、北九州より千葉県習志野市の送り出した事があった。進師範も二十代半ばで、私も二十代後半だった。私も、弟子からは若男女を問わず「先生」と呼ばれていたが、進師範も道場生からは「先生」と呼ばれていた。「先生」という呼称は、「自分が師事する人」に対する敬称であり、一方何事かに優れた面

を持っている人に対し、こう呼称するのであって、もし、その人間が指導的立場にないのであれば、「先生」等とは呼ばれないのである。
よく指導的立場にある者に対して「さん」付けて呼び合う武道団体の見かけ。これは明らかに間違っているのであるが、指導者自身もこれに気が付かず、「さん」の方が親しみがあつて良い等という愚かな指導者がいる。また指導者としての自覚が欠け、したがって目下の者から、一切の尊敬の伴わない「さん」付けて呼ばれるのである。こうした次元に止まっている者は、武道等の愛好団体の長を勤めている者に多く、こうした団体が、如何に周囲から尊敬を受けていないか、それを如実に物語るのが、指導者に対して「さん」付けする呼称である。

本日の習・離・破の意味を解説する

昨今は、習・離・破という言葉すら、意味薄になった時代である。また例え、この言葉を知っていても、本当に理解するものは少ないようだ。

私が習・離・破を実践した時は、「若冠十八歳」の時であった。最近では、習・離・破の本当の意味を知る者が少ないが、本日の習・離・破は自分の師匠から離れ、破る事だと考えているようだが、これは大きな間違いである。

世間一般ではこれを各ランクと捕らえ、「習」から順にこなす事を想像するようだが、これは間違いである。習・離・破を「致す事」とは、道の入口に立った時から、既にこうした「行ない」は始まっている筈ではない。

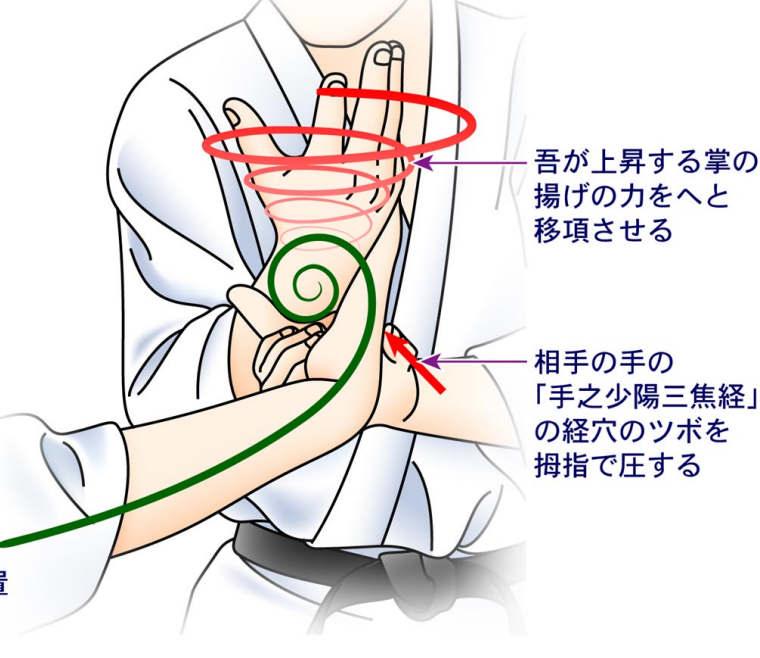
西郷派大東流合気武術では「致す事」を「習・離・破」で顕わす。また、習・離・破という、それは「習・破・離」の

間違ではないのですか、と御丁寧に御注意に及ぶ者がいる。そもそも習・破・離は「書道の世界」で起つた言葉である。第一段階としての「習」は師より字の形や筆遣いを習うことで、これを繰り返して練習する事を言う。

書道の場合も、武道の場合も、最初に来る言葉は「習」である。この点に於いては西郷派大東流とも同じである。しかし言葉は同じでも、それは行動に於いて違っている。
本来の「習」とは、元々教える事を遣らない西郷派大東流は、命賭けで師から「教えを自ら請う」ことであり、その習ったものが、正しく実践しているかどうか、ということについて

合気戦闘理論 その七

そしてここに述べられてくる中心課題は、日本の土壌の固有の華として、「桜花」を挙げ、これがその力の美を備えた、「生の対象」であり、この根底には道徳的雰囲気薫が放たれて居ると言つのである。



吾が上昇する掌の揚げの力をへと移項させる
相手の手の「手之少陽三焦経」の経穴のツボを拇指で圧する

相手の力の誘導する位置

これを象徴するものが、安倍貞任と源頼義・義家とで行われた衣川の合戦(前九年合戦)であり、十一世紀後半、衣川の堤で行われた戦闘の際の歌合戦を例に取っている。
平安中期の豪族で頼時の子であった貞任は、東国(現在の東北)の将として、指揮を取っていたが、義家軍に攻め込まれ、敗走した。

義家は逃げる貞任に向かつて、「きたなくも、うしろを見するものかな。しばし引きかへせ。物はは」と大声を飛ばした。
それを聞いた貞任は馬首を返すと、勝者・義家は、衣のたてはほころびにけりと即興に歌を詠んだ。
これに貞任応えて、
年をへし糸のみだれのくるしさにと返したのであった。
この時、弓を引き絞っていた義家は、突如その手を緩め、馬を返して

討ち取るはずの敵将を逃がしたという逸話がある。
この義家の奇妙な振舞いに、部下たちは詰問し、「何故逃がしたのか」という事に応えて、「敵にあのようによく攻められながら、心の平静さを保持している武將を捕え

木の葉返しと謂われた大東流の小手返し

山本常朝の武士道観
一般に武士とは、武士道の実践者として、刀を差し、武芸・武技を習い、軍事に携わる者を「武士」と思っているようだが、これは誤りである。
広い意味で、一般にはこうした類を指すが、武士を武技を職能として生活する職能民と捉える立場からは、平安後期に登場し、江戸時代まで存続した社会層を、一般的には武士階級と言つ。
しかし武士というだけで、武士道の実践者であるとは限らない。更には「さむらい」、「ものぶ」、「武者」、「武人」、「武將」という言葉がある。

で、今度は自前で弟子を集め、自分の知つていて、習った事を、弟子にも通用するか、これを試す事である。自前の弟子を持たなければ、いつまでも「入口」に立った状態であり、この「入口」から中に入つて、「本当の教え」を請う事が出来ないのである。
問題は第二段階の閉門である。「離れる」(世間一般で云われている習・破・離は、第二段階が「破る」ことで「離れる」ことではないようだ)という事であるが、離れるとは入門時の自らの指導者から離れる事を言う。

指導者の教えを後生大事に鵜呑みした形で、それをいつまでも守り通しているのでは、全くの進歩がない。指導者は指導者の範疇を抜け出す事が出来ず、その中で堂々回りをしているのであるから、まずここから離れる事が肝心であり、要するに「乳離れ」をするということである。指導者もまた、不完全なものとして、良いものも悪いものも同時に兼ね備えている為である。良いものだけを見詰めていけば、上達するが、悪いものだけを見詰めていると逆行して、進歩はない。一方的に師から教わるばかりでは進歩がななく、守ばかりでは上達が望めないからだ。

西郷派大東流合気武術総本部

http://www.daitouryu.com/
尚道館HP http://www.daitouryu.com/syoudouka/
〒802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
総本部 尚道館 093(962)7710代表